水　色　の　星

故　郷　へ

下宿の窓を打つ雨は、初冬の冷たさを感じさせるものがあった。喜市は、火の気のない部屋で窓を流れる水滴を見つめ、寒さに身を縮めながら故郷の村を、人々を思った。

今、自分が村から遠く離れた横浜で英語を学んでいることと、迫りくる寒さと貧困と差別の中で苦しみもがく仲間たちのくらしとを、どう結びつけたらいいのか。果たして、このまま英語専門学校に学び、故郷から離れた地で差別とかかわりのない生活を送っていていいのであろうか。

ーーーー　清水喜市は、1893（明治２６年）西播磨の被差別部落に生まれた。父は村会議員もし、村では裕福なくらしのほうであった。しかし、小学校に通うころになると、他の地域の子どもたちが喜市の村の子どもたちをなぜか避けようとするのだ。仲良くしようと話しかけるが、ますます避けようとする。もしかして、自分の体に何かついているのではないかと思った喜市は、一人、村の近くを流れる川に入り、小さな手足や体を必死にこすってみた。だが、相変わらず喜市や喜市の村の子どもたちだけは校庭の片隅で時を過ごすしかなかった。

村人たちのくらしは子どもたちの悲しさと同様、みじめなものであった。入会山から排除され、わずかな田畑を耕し、定職をもつ人はまれだった。番傘をさせば通れない道、屋根は傾き、壁は落ち、薄暗く、土間にはいつくばった生活。それは長い間の不当な差別がもたらしたものに違いなかった。ーーーー

雨は相変わらず窓ガラスを打ち続けている。ひざを抱く喜市の両腕に一層力が強く入った。喜市は自らが受けた不当な差別から逃れ、ともに過ごした仲間から離れ、自分一人の幸福を求めることは許されないと思った。

喜市は学業半ばにして故郷に帰る決意をした。社会のゆがみを集中的に受けている故郷の人々とともに歩もうと心に誓ったのだ。

雨はまだやみそうになかった。しかし、寒さは幾分薄れたように思われた。

水　平　社

故郷に帰った喜市は、学校で悲しい思いをさせられ、厳しいくらしに打ちひしがれる村の人々と手を取り合って、差別をなくしていこうと考えた。そして、差別に悩み、苦しむ人たちが力を一つにし「人間みな平等」という社会を実現していく闘いを始めた。

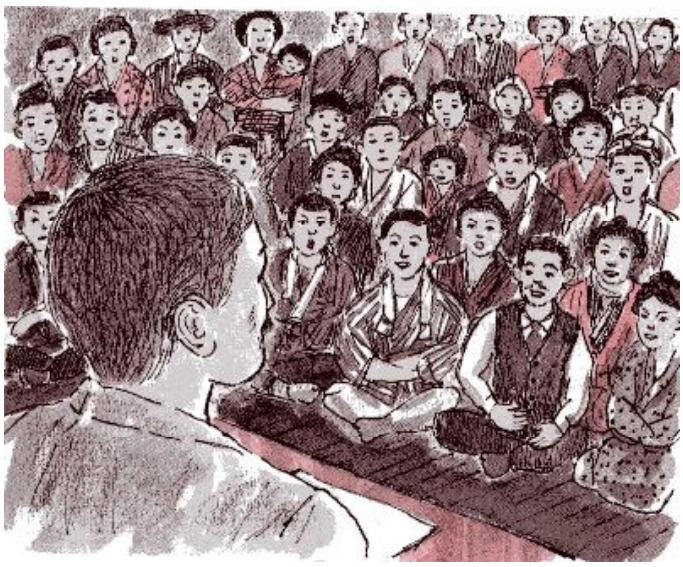
ちょうどそのころ、全国各地で、差別と闘う人たちが手をつなぎ始めていた。１９２２年（大正１１年）には、京都岡崎公会堂で、部落解放を訴える「全国水平社創立大会」が開催された。喜市は三十人余りの仲間たちとともにこの大会に参加した。

それからの喜市は、

「もう泣き寝入りするときではない。今こそわれわれの手で部落を解放するのだ。」

と、郡内外を問わず説いて回った。

郡水平社創立大会の日。



「われわれは、決して無理なことを望んでいるのではない。うまいものを食べ、裕福な生活をしたいのでもない。われわれの子どもを教室の中で分けへだてなく座らせたい。運動場の片隅にかたまっている彼らを、みんなといっしょにのびのびと遊ばせてやりたい。そして、大きくなったら役場にも勤めさせたい。教壇にも立たせたい。安定した仕事にもつかせたい。そして、心になんのわだかまりもない人間になってもらいたい。われわれの望みは、ただそれだけだ。あまりにも当然の要求にすぎないのだ。」

喜市は、静かに語り終えた。２００人をこえる郡内の仲間たちの熱い拍手が、会場となった村のお寺の本堂に響き渡った。郡水平社の代表者に選ばれた喜市は、郡内はもちろん、丹波や但馬なども歩き、兵庫県水平社の結成にも参画した。

生まれ変わった村

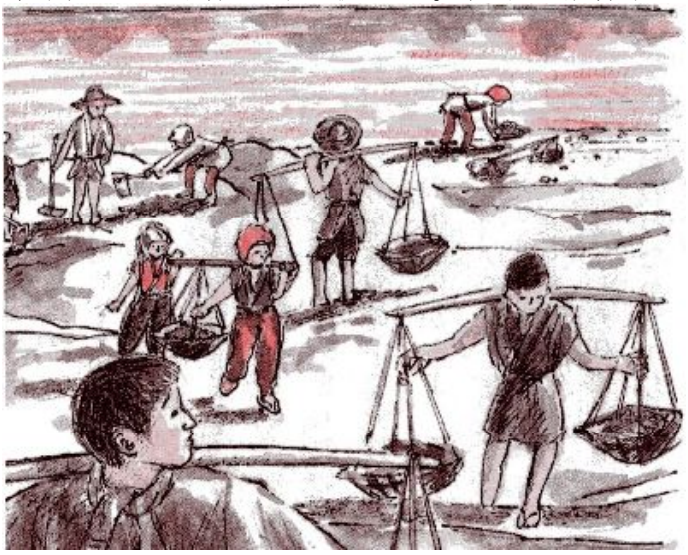
喜市は、差別が貧しさをつくり、貧しさが差別であると考えていた。

生活基盤の立て直しを図り、貧しい生活から村人を解放することが、何よりも大切なことであると喜市は考えた。こわれかけた住宅の改善や、狭く、曲がりくねった道路の工事などには、莫大な資金が必要である。一日も早く取り組まなければならない課題ではあるが、村にそんなお金があるはずはなかった。

喜市は資金集めに奔走した。再三県庁を訪ね陳情もした。ついには単身上京して、政府にも資金の提供を要請した。喜市らの強い信念と熱意にうたれた政府は５万５０００円を助成することを約束し、県も同額を支出することになった。そして、甘地村の村議会は徹夜の話し合いを続け、ついに１４万円（当時の甘地村の年間予算は５万円）を支出することにした。

１９３２年（昭和７年）から３年計画で村の改善事業が始まった。

喜市は陣頭指揮にあたり、村の人たちも総出でこの事業に汗を流した。喜市は指揮するだけではなく、自分ももっこをかつぎ、手押し車で土を運んだ。村の東を流れる大川の川原から砂利や砂を運び、幅４メートルの道路が新設された。村の中を東西南北に道路が通り、排水溝、用水路も完成した。住宅も道路の周辺に次々と建てかえられ、村は完全に一新された。甘地村のなかで一番遅れていた村が、今やもっとも整備された地域に生まれ変わったのである。



教育にかける

喜市は、自分の村だけではなく、全村の人々からの信頼を集めるようになっていた。そして、１９３６年（昭和１１年）、多くの人々に請われて甘地村の村長に就任した。郡内で初めての被差別部落出身の村長であった。喜市は、「部落差別は政治が生み出したものであるから、その解決のためには政治の姿勢が変わらなければならない。」との信念で取り組んだ。

なかでも、自らが苦々しい体験をした教育を改善するために大きな力を注いだ。人と人がお互いを大切にし合う心を、子どものころから育てておかなければならないと考えたからだ。当時、郡内ではもっとも立派な校舎を新築し、次代を背負う若い人たちの育成に努めた。さらに、差別されてきた村のことを先生に知ってもらい、子どもたちと接触を深めてもらうためには、自分たちの村に住んでもらうことが一番だと考えた喜市は、教員住宅を建て、無償で提供した。また、村の青年団、婦人会など、成人のための勉強会を設けた。差別に負けず、自立していく力をつけていく教育を政治の中心にすえておし進めていったのだ。

こうして、村の子どもたちが学校の片隅に追いやられることや、進学できないでいたことなどの問題を一つ一つ解決していった。

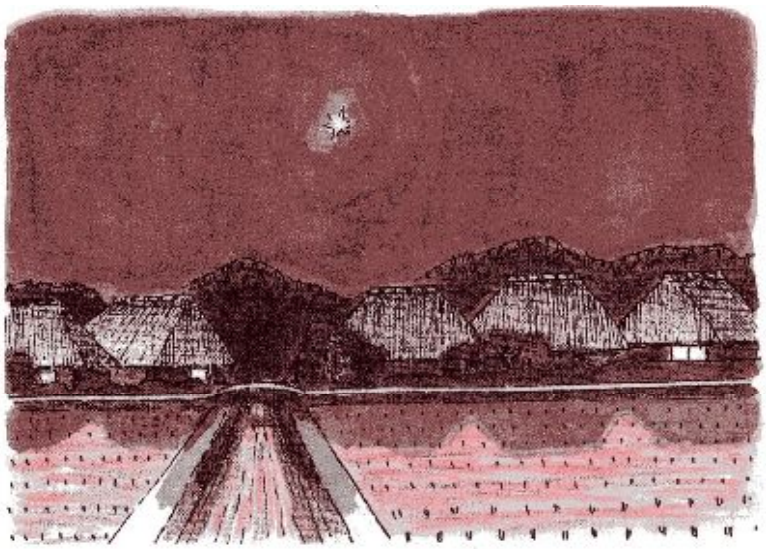
今　も　な　お

喜市は政治を甘地村のすべての人々の幸せにつなげていくため、精魂のすべてを傾けた。甘地村の人々も喜市の手腕に期待をしていた。

しかし、次の仕事のために上京する途中、喜市は突然の病で倒れ、そのまま帰らぬ人となってしまった。４７歳という若さであった。

１９４０年（昭和１５年）５月７日、喜市の葬儀は、彼が部落解放の宣言をしたお寺で、村人の悲しい涙につつまれながらしめやかに行われた。

喜市の計画のもとにつくられた用水路は、今も澄んだ水が音もなく流れている。そして、満々と水をたたえた田には、水色の一番星が映っている。



出典：「友だち」－－平成５年３月１日発行：兵庫県教育委員会
中学校用の同和副読本に掲載されたもの